お嬢様と日常と

いのいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お嬢様と日常と

【Ｎコード】
Ｎ８５０８Ｓ

【作者名】
いのいち

【あらすじ】
名家のお嬢様九条　詩歌。
完璧なお嬢様で非の打ち所がない彼女があるきっかけで聖爛女学院に転入させられてしまった。
そんな彼女が女学院を卒業するまでのお話。

更新は3日に1回程度（予定）

評価をいただけるとモチベーションにもなりますのでよろしければお願いします。

第一話（前書き）

さてさて、がんばって最後まで書き上げられるようがんばります

第一話

私の名前は九条　詩歌

十名家の一つ、九条家のお嬢様。灰色の髪と瞳を除けばいたって普通だと思う。

あとはお嬢様らしく家の名に恥じないようにと厳しく躾けられてきたから身の回りの事も一通り出来るくらいだろうか。

毎日学校と家の行き来以外にあまり外出は出来なかったが何一つ不自由なく生活している。いや、生活していた。

「おはようございます、お姉様」

「御機嫌よう。いい朝ね」

こちらが微笑みながら挨拶をするとなぜか顔を赤くして行ってしまう。相変わらず不思議に思いながら内心では苦笑いしていた。

聖爛女学院

この学院に入るためには素性を調べ上げられた上に、有力な推薦人による推薦がなければ試験を受けることすら出来ない名家のご令嬢しか通えない完全なお嬢様学院である。

校風は生徒の自主性を尊重したもので校則が厳しいわけではない。お嬢様ということで中には純粋な娘や世間知らずな娘も少なからずいるので厳しくしたところであまり意味はないのかもしれないが、淑女としての嗜みを学ぶ為に俗世から切り離し閉じ込める、檻のような一面もある。

でも、私は元からここに在学していたわけではない。お嬢様とはいえ私は堅苦しいのは好きではない。

私、九条　詩歌という個ではなく、九条家の娘という肩書きのために縛られるのが嫌いだった。

（今日からここで1年間・・・か）

「何でこんなことに・・・まぁ、自分の所為なんですが」

独り言を呟きつつ数日前のことを思い出していた

第一話（後書き）

出来るだけ短く区切って書く予定です

第二話（前書き）

無事1年間終わることが出来るのかな・・・

第二話

・・・数日前・・・

都内某所、とある屋敷から慌しく声がする

「お嬢様！どこにおられるのですか！」
「お嬢様ー！」
「お嬢様ぁ！いい加減出ていらしてください！」

声を上げながらぱたぱたと走りまわるメイド達。
そんな彼女たちを物陰から眺めつつため息をつく影が

（まったく、たまには息抜きをしてもいいではありませんか・・・）

今の時間は本来稽古の時間である。
普段は真面目に受けているのだが、毎日3，４種の稽古をしているとたまに羽を伸ばしたくもなる。

「ふふっ。そう簡単に捕まって堪りますか」
（といっても、これだけ探し回られると逃げるのもそろそろ限界でしょうか・・・）

うーんと唸りつつ様子を伺う

「詩歌お嬢様はまだ見つからないのですか？」
「本当に一体どこに行ってしまわれたのか・・・」
「屋敷の外には逃げてはいないと思うのですが」

外の様子を見ると玄関の前に3人、そこから外に出る門まで5，6人は確認できた。

（これは外は無理ですね・・・）

ふと時間を見ると17時45分。逃げはじめてから2時間になろうとしていた。

（じっと静かな稽古ばかりだからたまにこういう刺激が楽しくなってしまうんですよね）

とはいえ、いつまでもこうしているわけにも行かない

「さてと、そろそろ部屋に戻りますか・・・」

部屋に戻ってしばらくするとノックの音が聞こえた

「どうぞ、あいていますよ」

入ってきたのは母様だった

「詩歌ちゃん、また逃げ出したんですって？」

苦笑いしながらそう言うと手近な椅子に腰掛けた

「必修な物は終わりましたし、覚えるのが早いからっていまのペースではさすがの私も疲れてしまいますよ」

母様に向き合うように座りながら答えると母様は少し考えるようにして

「そうねぇ・・・詩歌ちゃんは何でも出来ちゃうからね。・・・それでね」

どこか嬉しそうに言った後ちょっと困ったような顔をした

「それで？」

「それで、お母さんも今のままじゃ詩歌ちゃんも大変だろうというわけで一つ考えました！」

どこか決心したようにいった。まさかその後にあんな言葉が続くなんて・・・

「詩歌ちゃんには聖爛女学院に行ってもらいましょう！」

「・・・え？」

「詩歌ちゃんには聖爛女学院に通ってもらいます！今の生活では学校では勉学、家では情操教育というわけで遊ぶ時間もないとおもいます！」

「は、はぁ・・・」

いきなりアツく言い出されて困惑しながら気のない返事をしてしまう

「でもお母さんはどちらも詩歌ちゃんにはしっかりやってもらいたいの。そこで！お母さんも通っていた聖爛女学院にいってどちらも両立しながら自由な時間も作って楽しく過ごしてもらおう！というように考えたわけです！」

どうだ！と言わんばかりに胸を張ってそんなことを言い放った。

「・・・ええと、母様ったらそんな冗談を。と答えるべきでしょうか・・・？」
「冗談ではないわ。もう学院のほうにはお話してあります。もう少しで新学期だし、丁度いいではありませんか」
良いも悪いも知らない間にそんな話が進んでいたなんて思いもしなかった
「私に拒否権は・・・」
「そんなものありません」
にこやかにきっぱりと言い放たれた
「ええと・・・」
「詩歌ちゃん！覚悟を決めてくださいな。1年間だけですから。とりあえず、この1年間聖爛女学院で立派な淑女としてがんばってね？」
そういうと封筒をテーブルにおいて「これみておいてね～」といって部屋から出ていった。
残された私は考えがまとまらないまま封筒の中身を読んでみた。
この学校は幼等部から高等部、大学までのエスカレータ式で私も幼等部から通うはずだったのだがそれを蹴って今の生活をしている。
小さいころから私個人ではなく九条家の娘として見られるのがいやだった私はどうしてもこのような学校には行きたくなかったのだ。

だからといって普通の学校も同じなのだが、素性を隠すことで誰も家ではなく個人として見てくれていた。

今の生活は嫌いではない。でも、母様の様子から察するに本気で私を転入させるつもりだろう。

母様が私を自分の母校に入れたかったのは知っているし、私も今まで我侭をしてきた。昔よりも心は大人になっていると思う。

いつまでも、自分の子供みたいな我侭を通すのも悪いと思っているし、折角私のことを考えてやってくれているというのだから無下に断ることも出来ない。

「はぁ・・・1年間、ですか・・・」

そう呟くと封筒を持って部屋を出た。

このとき、自分がどれだけ甘い考えをしていたか思い知らされることも知らずに・・・

第三話（前書き）

うー

第三話

学園のある部屋の前。詩歌はいま一つ踏ん切りがつかないていた。

「何にしても、門もくぐってしまったし・・・」

（ここで帰ったとしても、母様は本気だったから家には入れてもらえないでしょうしね・・・）

「仕方ない・・・ですね」

内心で自虐的に苦笑いをしつつ、一呼吸おいてノックをした。

「どうぞ、お入りください」

「失礼します」

その部屋―理事長室に足を踏み入れると、そこには一人の女性が椅子に座りこちらを見ていた。

「はじめまして。貴女が九条詩歌さんですね？」

「はい・・・はじめまして」

私がどこか不信がっているのにきづいたのか、困ったような笑みを混ぜつつ席を立った。

「私はこの学院の学院長の四宝院まどかです」

「随分とお若いですね。まどか先生」

若干訝しげに問うと苦笑いしながら

「そうですね。この学院は四宝院家の所有物で当主が学院長の務めをしているんです。私はこれでも四宝院の当主ですのでその務めを行っている、といたところです・・・さて」

会話を切り上げると、じっと私の顔を見詰めた。

「それにしても、彩香さんに似て本当に美人ね・・・」
「母様をご存知なのですか・・・？」
「もちろんよ。貴女のお母様、彩香さんは私の一つ上の先輩でとてもお世話になったわ」
「そ、そうなんですか・・・」
「普段はおっとりしているけど、やるときはやるのよ。私もはじめは別人と思うくらいだったから信じられないとは思いますがね」

私には「あの」母様がそんな風に人に慕われるとは思ってもいなかった。
まどか先生は懐かしむような幸せそうな表情をしていたが、私は自分の知る母様を思い出したら表情に出たのかまどか、先生は苦笑いを零した。

「うーん・・・彩香さんから話を聞いてわざわざ編入してくるというからどんな子かなと思ってたけど、想像していたような子とは違うようですね？」
「どういった話を聞いたのかは知りませんが、一体どのようは想像をされていたのですか・・・」
「もう少し我侭というか、そんな感じな子かなと勝手に思っていたのですが・・・しっかりしてるというか、あの母にしてこの子ありって感じかしらね」
「どういう意味ですか・・・？」

「そのままの意味よ」

釈然としないながらも言い切られてはそれ以上は言い返せない。

「とにかく、彩香さん、貴女のお母様からの要請である貴女の転入を私―四宝院まどかの判断の下に受諾します」

「本気で仰っているんですね？」

「編入試験の成績も優秀・・・というかほぼ満点で文句のつけようもないですし、話し方や仕草、どこをとっても問題はないでしょう。むしろ、こんな優秀な子がうちの学院に来てくれてうれしいくらいです」

にこにこと笑顔でこちらを見るまどか先生に言葉を返す事もできずため息をついた。

「何かあったら、何時でもここに訪ねていらっしゃい。綾香さんの子だからというわけじゃないけど私、貴女を気に入ってしまいましたから」

「は、はい・・・わかりました」

「さて、そろそろいい時間ね」

時計を見ながらまどか先生が言うと扉がノックされる音が聞こえた

「うん、時間通り・・・どおぞ、お入りなさい」

「失礼します！」

元気な声で扉が開かれると懐かしい姿がそこにはあった。

第三話（後書き）

出来るだけ一定して書きたいなー

第四話（前書き）

こんな作品でも評価を頂けてうれしいです！
呼んでくださっている方のためにもがんばります

第四話

「失礼します！」

元気な声とともに入ってきたのは詩歌の妹―九条朱音だった。

「あ、あかね・・・？」

「詩歌姉様っ！」

言うと同時にタックルと言わんばかりの勢いで抱きついてきた。

私は後ろによろけながらも何とか抱きとめると困惑したように問いかけた。

「ど、どうして貴女がここに・・・？」

「姉様・・・私がこの学校に居るのを忘れてしまったんですか？」

「ごめんなさい。そういう意味じゃないのよ。どうしてここに居るのかではなくて、なんて言ったらいいのかしら・・・」

「むー・・・姉様は私に会えてうれしくないの？」

頬を膨らませて少し拗ねたように上目遣いで見上げてくる朱音に苦笑いをしながら謝ったが、私からの返事に不満なのか唸りながら絡んでいる。

「ふふ、ごめんなさい。久しぶりね朱音。元気にしていたかしら」

「もちろんです！姉様も元気そうでよかったです！」

えへへ、と笑いながらぎゅっと抱きつく朱音の頭を優しく撫でていると、まどか先生が苦笑いしながら

「あらあら、これでは「赤薔薇の君」も形無しね。本当にお姉さんが好きなのね」
「あ・・・」
はっと我に返ったのか朱音は顔を赤くしながら私から離れた。
「あ、あはは・・・」
「赤薔薇の君・・・？」
「あ！えっと・・・そうだ！まどか先生！そんなことよりも！」
尋ねようとしたら朱音は慌てたようにまどか先生に話を振ると、可笑しそうに笑いながら
「ふふふ、そうですね。朱音さんを呼んだのは訳があるんですよ。詩歌さんはこの学院の敷地のことで分からないことがあると思いまして、その案内役にと」
「そういうことなのです！今日から一緒に住むわけですし、寮の案内も必要でしょ？」
敷地の案内はとても助かると思ったが、私はそれよりも気になることがあった。
「寮・・・の案内？」
「そうですよ！今日から私と同じ寮で生活するのでしょ？」
「えっ！？」
（ちょっとまって、そんな話聞いてないですよ！）
困惑しながらまどか先生を見ると少し驚いた様子で
「あら？彩香さんから聞いていなかったの？今日から貴女は学校の

寮で生活していくのですよ？」
「そ、そうなんですか・・・」
（そういうことはしっかり教えてくださいよ母様・・・！）
「寮監にも話はしてありますし、荷物も届いているはずですので詳しい話はそちらで聞いてくださいね」
「はい・・・わかりました」

なんだか私の知らないところでいろいろなことが決められていたらしいが今更どうしようもないのでもう従うしかない

「それじゃ、姉様いきましょう！」
「はいはい、よろしくおねがいね」
「何かあったら私のところまでいらっしゃい。それでは良い学院生活を」

異様に張り切って腕をぐいぐい引く朱音に苦笑いしながら答えると笑顔で見送るまどか先生に頭を下げ学院長室を後にした

第四話（後書き）

次回は寮でのお話の予定です。

なかなか始まらない学院生活・・・

まだまだ学院生活が始まるまでには時間が掛かりそうです

第五話（前書き）

あれ・・・寮の話にたどり着いていない・・・

しかもなんだか重い・・・？

もしよかったら評価などいただけると嬉しかったりします！

第五話

学院長室を出てから終始ご機嫌の朱音に引っ張られるように寮へと案内されていく

「ずいぶんと広い学院なのね・・・」

「そうですねー。でも、その分自然も多いし施設も大きく作られているんですよ！」

ニコニコとまるで自分のことを自慢するように話す朱音に釣られて私も自然と笑みが零れた

そうだ、もうここで1年を過ごすって決めたんだ。それに寮で生活できたほうが早く友達も出来るだろうし・・・

「ね、朱音。学院は楽しいかしら？」

「たのしいです！私は1年のときからなので慣れたというのもあると思うんですけどね」

あはは、と笑いながら私のとなりを歩く朱音。

――　朱音は去年からここの学院にいる。

朱音はいつも私について歩いて何でも私の真似をしていた。勉強をするにも、稽古をするにもいつも・・・

何がそんなに楽しいのかいつも目を輝かせて私を見ていた。

ただでさえ一緒に行動しなくても私と比べられ周りから厳しい評価を受けるというのに、いつも・・・「姉様はさすがですね！」「姉様は私の目標です！」「いつか姉様に追いついて見せます！」と言って笑っていた。

私は私、朱音は朱音だ。私は朱音がどんなに努力してどんなに頑張っているかを知っている。それでも周囲は家で見てくる。朱音の前にはいつも私がいて基準として壁になっているのだ。私に出来るのだから朱音ももう少し出来る。もう少し出来るだろう、と。

周囲にどんなことを言われようと笑顔で慕ってくれる朱音が私はいつも眩しかった。

私を疎ましく思わないのか。憎くはないのか。嫌いにならないのか・・・・・どうしてそこまで真っ直ぐに見詰めてこられるんだ・・・

私に追いつこうと努力している朱音。私の所為で認められずにいる朱音。私を慕ってくれる朱音。

ついに私は聞かずには居られなくなった。

「ね、朱音・・・貴女は私を・・・疎ましくは思わないの・・・？」

「姉様？」

「私が憎くならないの・・・？嫌いにならないの・・・？」

「ど、どうしたんですか？いきなりそんな・・・」

「お願い・・・正直に答えてほしいの」

「ぁぅ・・・・・・」

困ったような表情をしてから私の真剣さを悟ったのか黙り込む朱音。

私にはその沈黙がとても長く感じだられた。

知りたくて聞いたのに知りたくないと思う自分がいる。

どのくらいの時間だったのか分からないが私の人生で一番つらい時間だった。

「・・・・・・ならないです」

「・・・・え？」

ふと発せられた朱音の言葉に自分でも分かるような間の抜けた声を出してしまった。

「わ、私が姉様をその・・・疎ましいとか、憎いとか、嫌いだとか。そんな風に思ったことは一度もないです」

「どうしてって・・・聞いてもいいかしら？」

こちらが真剣なときに朱音が嘘を言うわけはないのは分かるが聞いてみたかった。朱音は少し不思議そうにしながら

「私がどうして姉様をそんな風に思わないといけないんですか？」

「どうしてって貴女・・・いつも・・・あんな・・・」

あんなに頑張っているのに私と比べられて努力を認めてもらえず・・・

「私は姉様も母様も父様もみんな好きですよ」

姉様が一番好きですけどね、と笑いながら言うとちょっと苦笑いを混ぜながら

「確かに周りからは厳しく言われてはいますけど、それは単に私の力不足な訳ですし。それに、姉様と比べられたら誰も敵いませんよ？それでも悔しいなとか、何でもすぐに出来てしまうので羨ましい

な、とは思うこともありますが私が頑張っているのをいつも姉様は見ていてくれます。母様も父様も褒めてくれます。頑張っているのを分かってくれる人が居てくれるなら私は頑張るだけです！」

朱音はやっぱりすごい子だ。私なんかよりも・・・

「辛くはないの？」

「姉様は私の憧れですし、目標なんです！そんな簡単に追いつけるなんて思ってません。だから、今はまだまだですけど頑張って頑張っていつか必ず姉様のようになって見せます！」

「そう・・・なら、楽しみに待っているわね」

「待ってくれなくていいですよ！姉様がゴールじゃないんです。姉様と一緒にがいいんです！」

「それでは私は追いついてくるのを楽しみにしていなくてはね」

朱音は私が手を抜くことを許さないだろう。だったら、私はただ彼女の憧れとして、目標として在り続けられるようにしてあげることしか出来ない。

やはり、朱音は私には眩しすぎる・・・

私は私、朱音は朱音。

私のようになりたいとする彼女を私は支え続ける自信はなかった。

第五話（後書き）

次回は寮にたどり着くまでのお話・・・の予定！

ちょっと書きたいことがまとまっていない感がありますがご了承ください・・・

第六話（前書き）

もう少し長くまとめたほうがいのでしょうか・・・

第六話

いつものように私を真っ直ぐ見詰めてくる朱音。

「どうして突然そんなことを？」

「どうして・・・かしらね」

苦しかった。朱音の思いを正面から受け止めるには私は余りにも脆かった。

きっと彼女に私よりも貴女のほうがずっと強いと、凄いのだといったところで理解してはもらえないだろう。

「ふふ、ほんと貴女には敵わないわね」

「そんなことないですよ！私なんてまだまだです」

えへへ、とどこか嬉しそうにしながらも否定する朱音に微笑みで答えるが心の中では泣きたかった。

心のどこかで朱音に疎まれ憎まれ嫌われることを望んでいたのかもしれない。

朱音は余りにも真っ直ぐすぎる。

何度見限られたいと思ったか分からない。

それでも、思うたびに朱音の言葉で思い留まらせる。

月日が経ち、私はある決意をした。

「朱音、貴女は聖爛に行きなさい」
「姉様と同じ学校ではダメなのですか？」
「そうね、ダメではないわ。でも、私と同じことをしていてはいつまでも追いつけないのではないかしら？」
「うぅ・・・」

私はなんて狡いのだろう。こう言えば朱音がどうするかなんて分かっている。
憧れ、目標としている私の言葉だ、真っ直ぐな朱音には十分効果はあった。
これでよかったんだ・・・自分に何度も言い聞かせながら。

そして、朱音は聖爛女学院に、私は別の私立学校に進学した。

「・・・さま！・・・姉様！詩歌姉様ってば！」
「・・・ぇ？」

ふと我に返ると朱音が前から顔を覗き込むようにしながら立っていた。

「私の話ちゃんと聞いていました？突然黙って立ち止まってしまってどうかしたんですか？」
「え、ああ・・・ごめんなさい。折角案内してもらっているのにぼーっとしてしまって」

いつの間にか立ち止まってあの時のことを思い出していたようだ。
はは、と乾いた笑いが漏れそうになるが何とか堪えた。
未だに私は・・・・・・いや、もうやめよう。
「もぅ！姉様ったら・・・久しぶりに再会して話したいこともたくさんあるんですよ？」
「そうね。本当に、久しぶり・・・」
「ぁ・・・姉様・・・？」
目の前にいる朱音をそっと抱きしめた。
これは贖罪の機会でもあるんだ、姉としてそろそろ向き合わないといけないな。
朱音は一瞬驚いた様だったがどこか嬉しそうな戸惑ったようなそんな表情をしていた。
「ふふ、二年ぶりだもの。でも、もう昔のように甘えん坊ではないのかしら？」
「・・・なんだか姉様が意地悪です」
私がわざとらしく言うと朱音は頬を少し膨らませながら拗ねてしまった。
「あら、ごめんなさい。嫌だったかしら？」
「そ、そういうわけじゃ・・・」
「そう・・・変わったわね。貴女・・・」
「？それはまぁ、二年ありましたからね。少しは変わりますよ」
あの時の選択が正解だったかどうかなんて私には分からない・・・

ただ、間違いなく朱音は変わった。
昔なら少なくとも言葉だけとはいえ否定などしなかっただろう。

「さすがに・・・ちょっと恥ずかしいですね」
「そうね。では案内の続き、お願いね」

朱音は一度ぎゅっと抱きしめてから顔を少し赤くしてそっと離れた。

「そうでしたそうでした。この学校の寮ですね、正門ちょっと外れた位置の通用門の所にあるんです。昔はいくつかあったらしいですが今は一箇所だけなので行くとすぐ分かります」
「なるほど・・・寮生は多いのかしら？」
「三年生が卒業してしまったので二年生だったお姉様方三人と一年生だった私を含め二人なので今いるのは五人ですね。後は詩歌姉様と一年生が数人入るので少ないですねー」
「意外と少ないのね？」

お嬢様学校と言うくらいだから寮生もそれなりに多いのかと思っていたのだけど、そうでもないらしい。

「それは、姉様のように家から通いたい人もいるからだと思いますよー？」
「そういえばそうだったわね・・・」

学院長室での会話を覚えていたらしく、悪戯っぽく笑いながら言う朱音に私は苦笑いを返すしかなかった。

「あはは、っとお話している間に着いてしまいましたね！」
「ここが・・・」
「ようこそ、今日から一緒に生活する学生寮です！」

余り大きくはないけれど、年代を感じさせる擬洋風の外観。
建物の周囲もとてもきれいに整備されていて門前の花が植えられている。

自分でも少し緊張しているのが分かる。

・・・深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「では、行きましょうか」
「はい！」

一歩踏み出し呼び鈴へ手を伸ばす・・・

第六話（後書き）

次回はいよいよ寮でのやり取り！

第七話（前書き）

新キャラ三名投入！

名前の読み方はあとがきに・・・

第七話

ピーンポーン

呼び鈴を鳴らした途端に、心臓が若干速く打ち始めるのが判る。

一年間うまく生活していけるだろうか？

他の子達と仲良くやっていけるだろうか？

きっと大丈夫だ。

ゆっくりと開け放たれる扉。

「はーい、どちらさま・・・・・・っ」

扉が開かれるとそこには長い黒髪に強気な瞳が印象的な女の子がいた。

何だか私を見て驚いているような・・・

「わぁ・・・」

「あら・・・」

その隣に立っていた物腰の柔らかそうな女の子、さらにその隣の落ち着いた雰囲気の女の子が同じように驚いたように私をみている。

それ以上言葉を発しず、三人ともぽーっと私を見ている。

私にどこか変なところがあったのだろうか・・・

そんなことを思っていると横から朱音が先程までとは違う、凛とし

た声色で話を切り出した。

「以前お話にあった私の姉様です」

その声で我に返ったのか、三人とも若干顔を赤らめながら苦笑いをした。

「申し遅れました。今日からこちらの寮でお世話になります、九条詩歌と申します」

「あ、はい。お話は伺っています。私は寮監を勤めている、霧沢陽菜といいます」

「お姉様方、玄関で立ち話というのは・・・」

「そ、それもそうですね。ではみんなで食堂に行きましょう」

朱音の指摘に慌てたように同意すると食堂へ案内された。

私は三人の後ろについて行くように食堂に向かう途中で気になったことを朱音に聞いてみた。

「ね、朱音。さっきの・・・」

私との態度と言うか違っていたのはどういうことなのか？聞こうと声をかけたら苦笑いを返された。

「あはは・・・後で訳はお話しますね」

「そ、そう・・・」

気になるが後でと言うなら今は気にしないようにしよう。

朱音とあの三人といい・・・やっぱり普通の学校とは違うのかな？

などと思ってしまう。

食堂に通されると、私と朱音の反対側に陽菜さんをはじめとする三人が座る形となった。

「さて、とりあえず自己紹介からしましょうか。私が今年の寮監を務めることになった霧沢陽菜です。寮のことでなにかわからない事があったらいつでも聞いてくださいね」

陽菜さんはそう言うと恥ずかしそうに微笑んだ。

「陽菜はこれでも生徒会長もやってるからね。しっかりものなんだよ」

「生徒会長もなさっているんですか・・・」

「え、ええと・・・まあ、一応そういうことになっていますね」

陽菜さんの隣に座っている黒髪のキツ目の女生徒がそう言うと、困ったような恥ずかしいようなそんな表情をしながらそれに応えた。

そういう役職には向いていないというか縁がなさそうに見えるんだが、人は見かけによらないようだ。

「お姉様方のお手伝いとしていたら、いつの間にか会長になっていたというか、その・・・」

どうやら本人はなろうとしてなったわけではないのだろうけど、そうして選ばれたからにはそれに伴う実力を認められたということなんだろう。

「えっと・・・私の話はおしまい！・・・次は藍香ちゃん」

「はいはい、ちょっとまってね」

あいかちゃん、といわれた彼女は厨房から声が聞こえた。
どうやら私たちのためにお茶を入れてくれたのか、カップを載せたトレイをもって出てきた。

「さ、お茶をどうぞ」
「・・・ありがとうございます」
「はい、朱音もね」
「あ、すみません。・・・ありがとうございます」

お茶を出された一瞬しまった、と言うような表情をして立ち上がろうとしたが、あいかさんが微笑みながらそれを制すると恥ずかしそうにしながらお茶を受け取った。

「お待たせ」
「ううん、ありがとう藍香ちゃん」
「はい、どうしたしまして」

みんなの前にカップを給仕し終えるとゆっくりと腰掛けた。

「私は沢渡藍香。よろしくして頂戴ね」
「よろしくお願いします」

行動の一つ一つがとても丁寧で落ち着いた物腰とあいまってとても優雅に見える。
「はい、じゃあ最後は涼子ね」
「へ！？あ・・・あぁ、うん」

声をかけられて面食らったのか、リョウコさんはびっくりしたような声を上げた。

「あ、あたしは近衛涼子。・・・よろしくね」
「こちらこそ、どうぞよろしくお願いします」
「あぅ・・・・・・」

会ったときから時折私のことをじーっと見詰めてきているのが気になっていなので出来るだけ精一杯優雅に笑い掛けると、なぜか目を逸らされた・・・どこか私に変なところがあるのだろうか・・・

「涼子ちゃん？なんだかさっきからちょっと変じゃありませんか？」
「確か、私と初めて会った時もこんな風になってなかったかしら。あー、あと朱音が寮に入ったときにも」
「あ、ああー！そういえばそんなこともありましたね」

私は何のことだか分からなかったが、どうやら以前にもこんな感じになっている涼子さんを知っているらしい。

「ち、ちょっと！やめてよ二人ともっ・・・」
「一体、どういうことなんですか？」

私の言葉に藍香さんは悪い笑みを浮かべて見せた。

第七話（後書き）

区切り悪かったでしょうか・・・

人物名

霧沢（きりさわ）　陽菜（ひな）

沢渡（さわたり）　藍香（あいか）

近衛（このえ）　涼子（りょうこ）

となっています。

主要メンバーが大体出てきたら随時更新型のキャラ紹介もしてみたいと思います

次回更新は５月１９日頃予定

第八話（前書き）

イメージ描写を文字にするのが難しい

第八話

藍香さんはニヤリという感じで笑みを浮かべ口を開いた。

「あのね、涼子って・・・」

「わーっ！ちょっ、ストップ！ナシ、それはダメっ！」

「あっ、ちょっと涼子っ・・・もが、もぁがっうぐあぁがあ～～！」

楽しそうに話そうとした藍香さんの口を物凄い勢いで涼子さんの手が物理的に止めた。

お嬢様学校の生徒とは思えない予想以上のアクティブな反応で私も戸惑ってしまった。

そういえば、さっきの話だと朱音にも同じようなことになったような感じだったな・・・

「ね、朱音、あなたも知っているのかしら？」

「朱音ちゃん？」

「え、えっと・・・」

私が朱音も知っているのかと聞こうと思ったが、涼子さんがそれに気づき笑顔でこちらを見た。

「あ、あはは・・・・・姉様、ごめんなさい」

「い、いえ、いいのよ・・・気にしないで」

こ、怖かったっ・・・

朱音の反応からするとおそらくは知っているのだろうけれど、きっと涼子さんにとってはそれほどまでに知られたくないことなのだろ

う。

「でも、ほら詩歌さんにもちゃんと説明してあげないとわけが解らなくてキョトンとしちゃっていますし・・・」

「いいの！そんなこと解らなくてもいいんだから・・・んもぅ！」

気にならないかといったら嘘になるが、さすがにあの反応の見た後で聞く勇気は私には無い。顔を赤らめながら頬を膨らませる涼子さんの反応を見ながら陽菜さんと朱音が苦笑いをした。

「ええと・・・気にしないでください。そのうちわかると思いますから」

「そ、そうですか・・・」

そのうちわかると言うなら無理に今聞くこともないだろう。

「そ、そんなことよりも、詩歌さんのこと聞かせてよ！・・・ねっ！」

逃げ場がなさそうな涼子さんがこちらに話を向けてきた。

私もちゃんと自己紹介していなかったことだし、ここは話に乗って流れを逸らしてあげたほうがいいだろう。

「ふふ、そうですね。では・・・」

私が今までどんな事をしていたか、前の学校ではどうだったか、どうして編入してきたか等をかいつまんで話していった。

その間、場を弁えてか朱音は大人しくしつつもとても楽しそうに私の話を聞いていた。

二年もの間離れていたのだから、自分の知らない私に興味があった

のだろう。

「そういうわけで、一年間ではありますが皆さんとこの学校に通うことになったのです」

ただ、ここに入る切っ掛けになったことは伏せておいた。
なんとなくあのやり取りは他の人には言いにくい・・・
自己紹介も含め軽くではあるが説明をした。

「へぇ～・・・つまり詩歌さんのお母さんの希望で編入してきたということなんだ？」
「え、えぇ、まぁそうなりますね」

間違いではないのでなんとも微妙な返事になってしまったが、涼子さんは余り気にした様子も無く納得してくれた。

「聖爛には朱音もいましたし、一年という短い間なので一緒にご厄介になることにしたのです」
「そうなんだ。詩歌さんもいろいろと大変なのね」
「そうでもないですよ。今までも楽しくやっていましたから。・・・・・・？」

こうして話しているときでも、涼子さんは時折私のほうをじっと見詰めている。
やっぱり私にどこか変なところがあるのだろうか・・・

「あの、私・・・もしかしてどこかおかしいのでしょうか？」
「えぇ！？いあ、全然！そんなことないよ！」

うーん・・・そんなこと無いと言われても否定しつつも時折見詰め

られるとさすがに気になってくる。もしかして・・・

「もしかして、この髪・・・でしょうか」

「私も、気になっていたのだけれど、詩歌さんの髪って銀色なのね」

涼子さんの答えは聞けなかったが藍香さんは気になっていたようだ。まぁ、やっぱりこれはどこでも聞かれるものだ。

「これは生まれつきなんです。祖母がドイツ人なので・・・隔世遺伝でしょうか」

銀といっても灰色に近い色なのだけど、私はなんとも思わないのだが周りからみたら変わって見えるのだろうか・・・

「やはり、そんなに珍しいものなのでしょうか・・・」

「そうね。でも詩歌さんにとても似合っていると思うわよ?」

「うんうん、今回は涼子ちゃんの気持ちが解るわぁ」

陽菜さんと藍香さんがなぜか涼子さんに同意していた。

さっきのことだろうか・・・

私が困惑しているのが解ったのか陽菜さんがおかしそうに笑いながら

「涼子ちゃんって美人さんに会うと見惚れちゃうんですよ」

「ちょっと陽菜!言っちゃダメってさっき言ったのに何言っちゃってるの!?」

「あ・・・ご、ごめんね?涼子ちゃん」

陽菜さんは無意識に言ってしまったのか、涼子さんに言われて気づきしまったという感じで苦笑いをしつつ謝った。

美人に見惚れる・・・？誰が、涼子さんが。誰に、私に？

「え、ええと・・・ありがとう、ございます」

不意に表情に出かけたものを押し込んで、できるだけの笑顔で返してみた。

「ご、ごめんなさい・・・」

涼子さんは顔を赤くして俯いてしまった。

第一印象の凛々しいイメージとは違ってとても可愛らしい女の子だったみたいだ。

あまり他人を自分のイメージで決め付けるものではないな・・・

「でもさすがは朱音ちゃんお姉さんといったところでしょうか、本当に美人さんですね」

「そうね、今回ばかりは涼子の気持ちが解ったもの」

そこで同意されても・・・なんて答えたらいいんだ。

「朱音ちゃんからお姉さんのことは聞いていたけれど、聞いていた以上で驚いてしまいました」

「朱音が、私のことを？」

「わっ！ちょっと陽菜お姉様！」

ふと横に座る朱音を見ると恥ずかしそうに俯いてしまった。

なんとなく分からないこともないので、あえて聞くことはしなくてもいいだろう。

「ありがとうございます。いままで私の容姿をここまで褒めて頂いたことが無かったのでちょっと恥ずかしいですね。」

とりあえず笑顔で返したら三人とも若干頬が赤くなったような気がした。

「詩歌さんが登校したら大変なことになりそうね・・・」

「そ、そうですね・・・」

「うん・・・」

何か小声で三人だけのやり取りをしてた気がしたが気のせいだろうか。

「まだこちらに来たばかりで右も左も解りませんので、皆さんにご迷惑をおかけすることもあると思いますが、これからよろしくお願いしますね」

「こちらこそよろしくお願いします」

「こちらこそよろしく」

「よろしくね」

柔らかい物腰で温厚そうな霧沢陽菜さん。

ちょっとアクティブだけど可愛らしい近衛涼子さん。

とても大人びた雰囲気を持っている沢渡藍香さん。

三人ともそれぞれかなり性格が違っているけど仲はいいみたいだ。

私も今日からここで生活するのだから早く馴染めるようにしないといけないな。

第八話（後書き）

話がなかなか進みませんね・・・！

次回更新は５月２２日０時ごろ予定です。

第九話（前書き）

長く書けない病になりつつある・・・

第九話

自己紹介も兼ねた雑談会になってしばらく経ったとき、陽菜さんが何か思い出したように立ち上がった。

「あっ！そういえばまだお部屋の案内していませんでしたよね、ごめんなさい」

「ついお話に夢中になってしまいましたね」

「一旦お話はここまでにしましょう。とりあえずお部屋に案内しますね」

「わかりました・・・よろしくお願いします」

それを切っ掛けにみんな解散することにしたのかそれぞれの部屋に戻っていった。

私は陽菜さんの後ろについて食堂を出た。

「えっと、お部屋は二階になりますね」

「随分と古い建物なんですね」

「私も詳しくはわからないのですが、なんでも築百年以上になるそうですよ」

「百年以上ですか・・・」

階段を上がるたびに少し軋みを鳴らすけれど、佇まいと相俟ってとても落ち着いた感じになっている。外観からはわからなかったがかなり古い建物のようだ。

「何度か大掛かりな改修工事があったので、昔のまま残っているところはほとんど内装なんですけどね」

「なるほど・・・」

「ふふ、快適であれば住んでいる私たちにはあまり関係はありませんけどね」

そういって愉快そうに笑う陽菜さん。住人からすれば、歴史よりも住みやすさが何よりも重要なのだろう。

「あら、この階段は・・・？」

「それは時計室に続いているそうですよ。どんな場所かはわかりませんけどね」

屋根に時計がついてたっけ・・・

話からすると、寮生は立ち寄らない場所なのだろう。

「えっと・・・こちらが、詩歌ちゃんのお部屋ですね。荷物はもう届いていますから」

「なっ・・・！」

扉が開かれた瞬間、あまりの衝撃に一瞬言葉を失ってしまった。

なんだこの部屋はっ！メルヘン過ぎる！天蓋付きのベッドなんて本当に使う人がいるのか！

「・・・どうかしましたか？」

「い、いえ・・・なんでもありません」

もしかして、お嬢様学校の寮というのはこれが普通なのだろうか・・・

「ふふっ。それにしても大人っぽいのに、とても可愛らしい趣味をしているんですね」

「そ、その・・・ちょっと子供っぽかったかしら」

ええっ！？一体どういうことだ！？この部屋は私の趣味ってことになるのか！？

「私は・・・もう少し普通の部屋にすれば良かったかしらって、今少しだけ思いました」

「そうですか？可愛くていいんじゃないかしら。私もこんな感じの部屋にすればよかったなぁって思っちゃいました」

そ、そうなのか・・・いや・・・そうか・・・？本当にそう思うのか？

「ええとですね、夕飯は七時ですから、少し前に食堂まで降りてきて下さい。あと、何か解らない事があったら、遠慮なく私の部屋まで来てくださいね」

「はい、わかりました」

「ではまたあとで」

「ありがとうございました」

とりあえず、陽菜さんを笑顔で見送ってみたけど・・・

この部屋で・・・一年間ですか。

部屋をもう一度見渡してため息をついた。

「取り敢えず、皆さんとはやってはいけそうですけど・・・ね」

思わず口に出して漏らしてしまったがこうなったら覚悟を決めるしかない。

物思いに耽っていたらノックがした。

「あの、姉様いいですか」

「あ、朱音・・・どうぞ」
なぜか遠慮がちに入ってきた朱音は部屋に入った途端に固まってしまった。
「ど、どうかしら・・・この部屋は」
「へっ！？・・・と、とても可愛らしいお部屋ですね・・・？」
明らかにに困った様子でこちらに笑みを向けた。
「陽菜さんによると、この部屋の趣味は私の・・・と言うことらしいのですけど」
「あ、やはり姉様がこの部屋にしたわけではないのですね」
この部屋が私の趣味だと思われるのは何となく複雑なものがある・・・
「当たり前でしょう・・・私は寮生の部屋はこれが普通なのかと思ったくらいです」
「この寮は、入寮するにあたって部屋の内装をある程度変えられるんですよ。私も入寮の際希望を聞かれましたし、皆さんそれぞれ違う部屋になってると思いますよ」
「そうなんですか？私希望なんて・・・・・・はっ、もしかして」
なんだかちょっと前に母様が嬉々として何かを私には隠すようにコソコソとしていたのはもしかしてこれだったのか・・・？
まぁ、私に知られたら間違いなくこの部屋は却下されるでしょうしね・・・
「あ、姉様。机の上に手紙がありますよ？」

「あら、本当。・・・・・・母様からだわ」

『詩歌ちゃんへ、この手紙が読まれているということは部屋を見たということですね。どうかしら、気に入ってもらえたかしら？詩歌ちゃんが一年間使うお部屋だもの、お母さんが一生懸命考えてやはりここは女の子らしい部屋がいいかしら？とかもう少し可愛らしくしたほうがいいかしらとか張り切って考えたの。きっと喜んでもらえてると思うわ。御礼はいらないわ、その分学院生活頑張って頂戴ね。追伸、困ったら学院長さんに遠慮なく相談しなさい。』

もうすでにこの部屋のことで若干困っているんだけれど・・・

母様のことだからきっと、本当に一生懸命考えてこの部屋にしたのだろう。

これは素直に喜んでおく事にしよう。

「お手紙、なんて書いてあったのですか？」

「この部屋は、母様が私のために一生懸命考えてくれたそうよ」

「あはは、母様は相変わらずですね。でも、姉様の趣味は別としてもこの部屋は姉様に似合っていると思います」

私ってこんなメルヘンな部屋が似合うのイメージなのね・・・素直に喜んでいいのかな。

「さすがは、お嬢さま学校ってところかしらね・・・」

「それはあるかもしれませんね。っと、荷解きのお手伝いに来たんですよ！あまり多くはないようですけど」

「そうね、ありがとう。助かるわ」

いえいえ、と朱音は何故か楽しそうに荷解きを始める。

取り敢えず、部屋を片付けを終わらせないとね。

第九話（後書き）

お部屋のイメージはお姫様！
天蓋つきのベッドにピンクの壁紙！

次回更新は５月２５日０時頃予定です。

第十話（前書き）

未だに詩歌ちゃん入寮初日終わりません！

この話で入寮初日半分終わり・・・

第十話

荷解きをしながらふと気になったことを朱音に聞いてみた。

「それにしても、涼子さんや藍香さんはあまりお嬢さまらしく振舞ったりしないのね。私ももう少しフランクに話すようにしたほうがいいのかしら？」

「そんなことはないと思いますよ。学院では涼子お姉様のような方は少数ですし。それに、確か学院では涼子お姉様ももう少し丁寧に話していたはずです」

「なるほど・・・寮だから少し緩めな感じなのかしらね。確かに、プライベートまでガチガチだったら過ごしにくいものね」

私の感覚とは違うところがあるのだろうか。

陽菜さんと比べると涼子さんも藍香さんもどこか違うような気がするのだけど・・・

「基本的には根っからのお嬢さまが大多数ってことかしらね」

「そう、ですね。そう考えていたほうがいいと思います」

となると、わざとらしくフランクな会話にしなくても大丈夫ってことかな。

「なかなか難しいわね・・・」

「姉様は姉様のままで十分大丈夫ですよ」

「そういうものなのかしら・・・」

取り敢えず、まだ学院が始まったわけではないし、難しく考えるのはやめておこう。

「それにしても姉様の荷物少ないですね」
「私が用意したわけではないもの・・・」
「そういえばそうでしたね」

入寮するのも今日知ったくらいなのだから荷造りはもちろんすべて母様がしてくれたのだろうけど、見たところ必要なものは一通り揃っていたのでこれといって困ることもないだろう。

「そうそう、寮でもそうだけれど、私もこの学院の一生徒なのだから姉だといって特別扱いは程々でお願いね」
「そうは行きません！」

姉妹だからといってあまり特別扱いされるとさすがに浮いてしまうだろうと思い言ったのだけど、即否定されてしまった。

「え・・・ど、どうして？」
「学院生活は一年間しかないんですよ！？悠長なことをしていては何もなく終わってしまうではないですか！」

あ、朱音が燃えている・・・

「もちろん、姉様に迷惑になるようなことはしませんから安心してください！」
「そ、そう・・・お手柔らかにね・・・？」

なんだか張り切ってるけれど大丈夫だろうか・・・
この二年間で朱音は本当に変わったな。私の知らない間にだいぶ成長したのかな。
まぁ、昔から母様に似て一度言い出したら何がなんでも全うしよう

とするところもあったし、任せるしかないな。
学院はまだ始まっていないというのに悩むことが増えてしまったが、今悩んでも何もいいことはない。
もともと多くはなかった荷物はアカネの手伝いもあって、あっという間に片付いてしまった。

「姉様はこれからどうするんですか？」
「どうしましょうか・・・」

夕食は七時からだとしてもまだしばらく時間があるな・・・

「取り敢えず、ひと休みしましょうか。知らない場所を歩き回るのも気が引けますし」
「そうですね。寮の中は見て回るようなところもないですし、あまり初日でバタバタとするものなんですからね」
「そうね。わざわざお手伝いありがとうね」
「いえいえ、あまりお手伝いするほどのものでもなかったですよ。それじゃ、私は一旦部屋に戻りますね」

部屋を出て行く朱音を見送ったあと改めて部屋を見渡してみた。
荷解きされて小物や本などが置かれ若干生活感が出ると始め見たときよりも幾分かはマシになったような気がする。気がするだけで慣れてしまったのかもしれないが・・・

「天蓋つきのベッドなんて私初めてですよ・・・」

などと独り言をしながらベッドに腰掛け、そのまま寝転んだ。

「あ、意外といい寝心地なのね・・・」

なんともいえないふかふかのマットがゆったりとした気持ちにさせてくれる。

天蓋尽きのベッドなんて落ち着かないと思ったけれど、これなら気持ちよく眠れそうだ。

「っと・・・このまま横になっていたら眠ってしまいそうね・・・」

ちょっと外の空気でも吸ってこよう。確かテラスがあったような・・・

部屋を出ると階段の正面にテラスがあった。

扉に手を掛けると鍵も掛かっていなかったので自由に使っていいものなのだろう。

「う～・・・ん、っと」

外の爽やかな空気を吸い込んで伸びをすると眠気も幾らかマシになった。

テラスからは正門から伸びる桜並木や学院の敷地の広く眺めることが出来た。

実感が湧かないですね・・・

「あれ。詩歌さん？・・・どうしたの？そんな所で」

「っ・・・！」

ぼーっとしていたら突然背後から声を掛けられた。

第十話（後書き）

区切り微妙ですかね・・・

続けると次の区切りが悪くなると思ってこんな感じになってしまいました・・・

次回更新は５月２８日０時頃予定です。

第十一話（前書き）

一場面につき二話ペースですね！

第十一話

ボーっとしていたら、京子さんがいつの間にかテラスへ出てきていた。

「お部屋の片付けが一通り済みましたので、ひと休みも兼ねて外の空気でも、と思いまして。来たばかりの場所を歩き回るのも気が引けますし」

「もう片付いたの？詩歌さんって物凄く荷物多いんだろうなって勝手に思ってたよ」

私はそんなに荷物持ちに見えるのだろうか。

「どうしてそうお思いになったのですか？ちょっとお聞きしてみたいですね」

「え・・・その、なんて言うか詩歌さんってお嬢さまっぽいって言うか、優雅って言うか・・・そんな人が毎日の着回しを考える所がちょっと想像できなかったから・・・かな」

着回し、か・・・そういえば、家にいるときは特に考えた事もなかったな。

これからはどうしようか、家から送ってもらうというのもあるのだけど・・・

やはりここは、自分で買い物にいって買い揃えたほうがいいかな。

「ふふっ。希望に添えなくて残念ですが、必要最低限の服しかもっていません」

「あ、いや！私が勝手にそう思っていただけであって・・・もうっ、詩歌さんってちょっと意地悪だよ」

少しばかりからかい気味に言ったら涼子さんはちょっと拗ねてしまった。

「あら・・・そういうつもりではなかったのですが、申し訳ありません」

「ぅ・・・そ、そこで謝られても・・・。そもそもあたしの勝手な思い込みの所為なわけだし」

本当に困ったのか、涼子さんはあたふたとしながらそんなことを言い出す。

涼子さんは意外と面白い人なのかもしれない。

「では、お相子と言うことで」

「そうしてもらえると助かる・・・かな」

そういって涼子さんは少し照れくさそうに微笑でくれた。

「もし、本当に衣装を多く持ってくるとしたら・・・寮に入らず学院の近くに家を建てるのではないかしら？」

「え！？」

「例え話ですけれど、ね」

さっきの涼子さんの言葉通り私が大量の衣装を持ってきたとしたらそうするだろうと思い口にしたが、それを聞いた涼子さんは一瞬キョトンとした後に何故か笑い出した。

「ぷっ、あははっ・・・あたし、詩歌さんには敵わないような気がする」

「ど、どういう意味でしょうか・・・」

何か変なことでも言ってしまったのだろうか。
でも、一体どこだろう・・・

「だって、詩歌さんは「衣装が多ければ学院の近くに家を建てちゃう」って言ったんだよ？そんな考えがすぐ浮かんできちゃう人に、私はお嬢さまじゃないって言われてもね」
「あっ・・・・・・」

そう言われてみれば・・・

「あはは。今気づいたみたいな顔だね」

可笑しいそうに涼子さんは笑っているが、私はちょっと恥ずかしくなってしまった。
確かに私の考え方はお嬢さま以外の何者でもなかった。
でも・・・

「ですが・・・お嬢さまでないと、自分では思っています。そう言われるにはちょっとばかり捻くれてしまっていますから」
「詩歌さん・・・？」

私の苦笑いしながらの自虐的な返事に涼子さんは戸惑ったような表情をした。

「そういう涼子さんはご自分をお嬢さまだと思いますか？」
「ええ！？あたしがお嬢さまに見える・・・？」

涼子さん自身、言動がそうではないということは解っているらしい。けれど・・・

「見えますよ・・・少なくとも私よりは間違いなく」
言葉遣いはともかくとしても、いつもしっかり伸びている背筋、なんでも物事を真っ直ぐ見据える視線は、素直に育った証拠だと思う。そんな人にこそ、お嬢さまって言葉は相応しい筈だ。
「き、急にそんなこと言われるとなんだか照れるなぁ。今までそんな事を言われた事なかったから・・・」
「ふふ、それは周囲の人が「貴女はお嬢さまですね」なんて聞くはずはないからでしょう。それに「自分がお嬢さまかどうか」なんて他人に尋ねたりもしないでしょうし」
「それはそうかもしれないけどさ・・・」
釈然としないのは私が私をそう思わないように、彼女も彼女自身をそう思えないのだろう。
それはそうかもしれない。涼子さんのお嬢さまの定義だと、涼子さん自身はお嬢さまには程遠いという事になっているはずだから。
「私は・・・そう思いますから」
「え、えっと・・・その、ありがとう」
そういって涼子さんは恥ずかしそうに頬を赤らめて視線を逸らした。いくら言葉遣いがお嬢さまらしくなかったとしても、涼子さんはひとりの女の子なのだ。
ところどころで垣間見る事できるその姿に思わず笑みが漏れてしまう。
「ふふっ。・・・あら、お話をしていたらだいぶ時間が過ぎてしま

ったようですね」
「あっ、本当だ。その・・・ごめんね、お邪魔しちゃって」
「いえ、私もお話できて楽しかったですから。一人で居ても詰まらなかったでしょうし、私の方こそお付き合い頂いてありがとうございます」

私としてもいろいろ考えさせられる事でもあったし、とても有意義な時間だったと思う。
一人だったらきっと、いろいろと考えたりしてしまって逆に疲れてしまっていたかもしれない。

「そんなお礼なんて、勝手に私が話したかっただけだし・・・」
「では、お相子・・・ですね」
「あはは、そうだね」

可笑しそうに笑う涼子さん。私はそんな彼女に心の中でもう一度お礼をいって微笑んだ。

第十一話（後書き）

まだ1日目も終わっていない・・・！

次回更新は5月31日0時ごろ予定です。

第十二話（前書き）

設定をあまり考えないで書いた結果今回のは少し可笑しいかもしれません・・・

第十二話

あれからテラスで涼子さんと別れ、一度部屋にもどった。
気がつかないうちに涼子さんと随分と話してしまっていたが不思議と気持ちが落ち着いた。
こんなときは一人で時間を使うよりも誰かと会話をしているほうが良かったのかもしれないな。

――夕刻

七時前に食堂へとの事だったので降りていってみると、皆集まっていた。

「あ、詩歌ちゃんも来ましたね」
「皆さんすでにいらっしゃっていたのですね。遅くなってしまって申し訳ありません」

早めに来たつもりだったのだが、どうやら私は一番最後だったらしい。

「いえ、違うんです。何故かみんな自分の部屋にいるよりもここに集まってしまうんですよ」
「そうね、部屋にいるよりもこっちのほうが落ち着く気がするわ」
「なるほど。皆さん本当に仲がよろしいですものね」

一緒に生活する時間が長いから同じ学院の生徒と言うよりも家族の

ような感覚に近くなるのだろうか。
ふと他のテーブルを見ると料理が準備されていた。
「・・・これは、すごいですね」
私が想像していた以上の料理がそこにはあった。
さすがお嬢様学校といった所だろうか。寮の食事といえど、帆立の貝柱のマリネや切られていないローストビーフなどの西欧風の料理が並んでいた。
「これが寮の食事なのかーって、あたしも最初に見たときは驚いちゃったよ」
「それが正しい反応かしらね。ここから、食べたいものを好きな量だけ皿にとって一人前に仕立てるのよ」
「なるほど・・・ヴァイキングのようなものなのですね」
感じだけでは栄養が偏りそうだがどれを見ても栄養バランスも考えられていているようだ。
「取り敢えず、席に着きましょうか。食事の前にお祈りをしますから」
藍香さんに促されて席に着き、私は見よう見まねで手を合わせた。
「主よ・・・私たちの日ごとの糧を今日もお与えください。アーメン」
「アーメン」
「・・・・・・アーメン」
慌てて結びの言葉を付け足すと、改めてテーブルの上の料理を眺め

る。
料理までここまでこだわる理由は単にお嬢様学校のそれだから、それともほかに何か理由があるのだろうか。

「まぁ、見た目はいまひとつだけど。味は良いんだよ」
「そうね。いつの間にか慣れたもの・・・どうぞ詩歌さんも試してみて？」

涼子さんと藍香さんはなれたように皿に盛って行く。
本当に量は任意らしい。
涼子さんはローストビーフが多めに取り、逆に陽菜さんは全体的に量が少なめだ。

「そうですね・・・では」

まず、メインの肉料理から切り方に気を使いながら盛り付け、それだけでは足りない彩りを添えるように、バランスよく焼き野菜を添える。
そのほかの料理も彩り、見た目などに気を配りつつ仕立て上げた。
ヴァイキングだからといって適当に盛り付けたのでは折角の料理が台無しになってしまう。
料理は数少ない私の趣味なので、料理は見た目も大切とのこだわりがあるのだ。

「・・・このような感じでしょうか。・・・・・・？」
「おおー・・・」

涼子さんの口から、声が漏れる。
何故かみんな手を止めて私を、と言うよりも私の皿を見ているような・・・

「あの・・・どうかしましたか？」
「詩歌ちゃん・・・すごいです」

どこか変だったのだろうか、それとも私が変なのだろうか。などと思っていたら、陽菜さんが嘆息混じりに感嘆の声を上げた。

「綺麗ね・・・料理雑誌の写真みたい」
「本当に凄いですね・・・」
「そ、そうでしょうか・・・」

そこまで拘ったわけではないのだが藍香さんと朱音も陽菜さんに同意するように呟いた。
料理が綺麗に切り分けられ、取り分けられ、１枚の皿にそれで１つの料理だと言わんばかりに美しい形を作り上げていた。

「・・・っと、それじゃ、いただきましょうか」
「そうね、いただきます」
「「「いたきます」」」

ぽーっと見ていた陽菜さんが思い出したように声を上げるとみんな、思い思いに食事を始める。

「でも、本当にすごいですね。なんだかプロの料理人みたい」
「同じ料理のはずなのに、あたしのよりもすっごくおいしそうに見える・・・」
「綺麗に盛り付けようとか、いつも考えていなかったけれど・・・こうして見せられると、それも大事なんだって実感させられるわね」
「私も全然気にしていませんでした・・・さすが姉様です・・・」

四人それぞれ私の盛りつけた皿を見て感嘆の声を上げた。

「ふふ、ありがとうございます。料理は私の数少ない趣味の一つですので、少し気を使ってみたのです」

「詩歌ちゃんはお料理も出来るんですか？」

「作れる、と言うだけで味までは保障できませんけれど」

「じゃぁ、よかったら今度何か作ってくれませんか？」

陽菜さんに加えて涼子さんまで私の料理に興味が湧いてしまったようだ。

あまり人様に披露できる腕前ではないと思うんだが・・・

「では、機会がありましたら」

「社交辞令じゃないから本当に作ってくれないと嫌だよ？」

涼子さんはどうしても私の料理を食べてみたいらしい。

さすがにそこまで言われては断るのも悪いだろう。

「わかりました。簡単なものでも良いのなら今度作りますので」

「ほんと？たのしみだなぁ」

「ご期待に添えられるかはわかりませんが」

食事はそんな私の料理の話を交えながら賑やかに進んでいくのであった。

第十二話（後書き）

もう少しで詩歌ちゃんの入寮1日目が終わりそうです！

一場面につき一，二話なのですぐではないかもしれませんが・・・

次回更新は6月3日0時ごろ予定です。

第十三話（前書き）

もう少し・・・もう少しで1日目が終わります！

第十三話

賑やかだった夕食も終わり、私は一度部屋まで戻ってきた。

「ふぅ・・・・・」

私はそのままベッドに倒れこむと、ゆっくりと息を吐いた。

さすがに少し疲れた・・・

朱音に陽菜さん、涼子さん、藍香さん。これから彼女たちと共に学院生活を送っていくのだ。

普通の学生生活。今まで縁遠かったものがもう私の隣にある。

まだ初日だけど私が予想していたものとは違っていたが、良い意味で違っていた。

今までの学生生活で私を名前で呼ぶ人はいなかった。

私を呼ぶときは誰でも「九条さん」「九条さま」今まで家族以外は誰も名前を呼んではくれなった。

呼ばれたとしても「詩歌さま」だった。

それをここでは一度も聞かなかった。聞かないどころか

「ふふ。詩歌さん・・・詩歌ちゃん・・・ですか」

なんだかくすぐったいような不思議な気持ちだった。

「詩歌ちゃん、いらっしゃいますか？」

その時、ドアを叩く音と一緒に陽菜さんの声がした。

また、だ。
自分でも頬が緩むのを感じながらベッドの上に倒した身体をゆっくり起こした。

「どうかしましたか？」
「まだ寮生が全員揃っていないから、お風呂の順番とかは決めていないんです。よかったらお先にお使いになってください」
「いえ、そういうわけにも・・・」

新しく入ったばかりの私が先にお風呂を頂いてしまうのは、さすがに気が引ける。

「詩歌ちゃんが気にするのも解りますけれど、割と宵っ張りの人が多いので・・・先に入ってもらえると助かっちゃうんですよ」

苦笑いをするように陽菜さんが微笑む。
してみると、もしかしなくとも陽菜さん自信はあまり夜型ではないのだろう。

「わかりました。そういうことでしたら先に頂きます。・・・陽菜さんが眠くなる前にね」
「えっ・・・私、何か自分のこと言いましたか？」
「いえ。ですが今の表情で少なくとも、涼子さんや他の皆さんほどには、陽菜さんが宵っ張りではないという事だけは判りました」

どうやら表情に出ているのに気づいていないようだ。
顔に出やすい所がある人なのだろう。私に指摘されて、目を白黒させている。

「ふふ。でしたら陽菜さん、お先にお使いになって頂いても・・・」

「いえっ・・・大丈夫ですから！お使いになったら私に一声掛けてくださいね」
「はい。わかりました」
「うん。じゃあ、私はこれで。・・・・・・・・・・ううん、そんなに顔に出てるのかなあ？」
陽菜さんは外に出てから困惑した声で呟くと自分の部屋へ戻っていった。
「では、参りましょうか・・・」
一階に降りると判りやすくお風呂場があった。
脱衣所ではじめに目に付いたのは、さすがはお嬢様学校の寮といったところだろうか、大きめの三人が並んで使える洗面台だ。そして、その横に壁掛けのロッカーがありそこに私物を置くようだ。
他には乾燥機付きの洗濯機が三台並んでいた。しっかりと使用方法から使用上の注意まで丁寧に書いた張り紙がしてある。
炊事は寮母さんが用意してくださっているようだが、掃除洗濯は自分でしなければならない。
いくらお嬢様とはいえ生活の最低限は出来なければならないという事だろう。
「取り敢えず、空いているところを使わせて頂きましょうか」
空いていたロッカーに制服を置いて浴室へ入ると、大きな浴槽が目に付いた。
十人は余裕で入ってしまえる大きさだ。
「お風呂は順番、ということでしたが・・・他の方と一緒に入った

りもできるのでしょうね」

学校の教室一つ分ほどの大きさの浴室に一人、と言うのもなんだか少し寂しい感じがするが今それを気にしてもどうにもならない、取り敢えず身体を洗って湯船に浸かろう。

「ふぅ・・・やはり広いお風呂はいいですね・・・」

お湯の温度も丁度よく思い切り手足を伸ばして入るのは広い湯船に自分だけだからできるというものだろう。
何も考えず天井を見上げていたら突然、扉が開いた。

「姉様いますか？」
「わぁあっ・・・！！」

扉を開けたのは朱音だった。
ぼうっとしていたので脱衣所に入ってきていたことに気づかなかったのだ。

「あ、朱音・・・？開けるときはノックをして頂戴」
「あ。忘れてました、ごめんなさい」

しまった、と言うような表情で謝る朱音に対して苦笑いをした。

「私としては扉を早く閉めてほしいのだけれど・・・何か用事かしら？」
「あっ、ごめんなさい。一緒にお茶を飲もうかと思って姉様のお部屋に行ったら明かりがついたまま居なかったのでどこに行ったのかと思って探していたら、陽菜さんにお風呂に入っていると聞いたので・・・」

そういえば部屋の電気を消してくるのを忘れていた。

「そう、わかったわ。もうすぐ出ますから少し待っていて」

「はい！・・・・あ、あの・・・姉様さえよければ明日、一緒にお風呂に入っていいですか？」

湯気で表情は見えなかったが声で恥ずかしそうにというのは判った。久しぶりに会ったのだからそのくらいはしてあげないと、ね。

「もちろん構わないわ。明日、入る前に声かけるわね」

「ありがとう姉様！それじゃ、食堂でまってますね！」

そう言って早足で浴室から出ていった。

再び訪れる静けさ。しかし、はじめに感じた寂しい感じが朱音が来た所為かなくなっていた。

「ふふ、あまり待たせるのも悪いわね」

私は一人そう呟いて浴室から出たのだった。

第十三話（後書き）

第一話目から1ヶ月過ぎたわけですが物語りは1日も終わっていないという・・・

1ヶ月で1日しか進まないとなると卒業するまで大体物語り内日数３４０日。

1日ごとに話を書かないとしても１００日分・・・１００ヶ月、え？終わるまで8年かかるじゃないですか！

と言うわけで、とても先の長い戦いになりそうです！

次回更新は6月6日0時頃予定です。

第十四話（前書き）

ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ

第十四話

お風呂から上がると、そんなに長く入っていたつもりもないのに、思っていたよりも時間が過ぎていた。
着替えて食堂に向かわないと。
しかし、夜具に制服はもちろんないだろうし、ジャージと言うのもおかしい。
母様が用意してくれたのは一体どんなパジャマなん・・・

「って、ちょっと!?なに・・・これ・・・」

そこには、ひらひらぴらぴらの沢山ついた物があった。
母様が用意してくれたネグリジェを見て私は絶句した。

「か、母様・・・こんなの、普通の女の子だって着ないんじゃないのかな」

しかも、これって態々オート・クチュールに注文させて作ってもらったのか。
こんなどこかの王宮貴族が着そうな物なんて私に似合わないような気がするのだが・・・

「まったく・・・・・・有り難くて涙が出そうですよ・・・」

考えても仕方ない・・・所詮は寝巻きなんだから。
寝てしまえばどんな服装だろうと誰にも見られないし、関係な・・・って、関係あるじゃないか!
これから食堂に行かないといけないのにこれではさすがに・・・

ここは制服で行くべきだろうか、いや行くべきだ。
だか、やはりお風呂上りに制服はそれもそれで可笑しいのではないか。
でも、いくらなんでもこの格好はないのではないか。
寝巻きを部屋に置いてきてしまっていたことにすれば・・・
いや、でも、だけど・・・
などと考えているうちに結局ネグリジェを着てしまっていた。
「あ、朱音だけになら・・・構わないかな」
などと自分を納得させて食堂へ向かった。

がしかし、扉の前に来た途端今一歩あけることが出来ないでいた。
いつまでもこうしているわけにも行かないだろう。
「はぁ～・・・よし、行きましょう」
深く息を吐いて一度頷いて扉を開けた。
「お待たせしてしてしまったわね、朱音・・・っ！」
「あ、姉さ・・・」
「「「・・・・・・」」」
出来るだけ自然に振舞って然もそれが普通なのだと言わんばかりに

声を掛けた。
だが、食堂にいたのは朱音だけではなく全員揃ってだったのだ。
私の声でこちらを向いた朱音は時間が止まったように言葉を紡いでいる途中で固まってしまった。
それと同じように陽菜さんも涼子さんも藍香さんもこちらを見て固まっている。

「あ、陽菜さん。お風呂、頂きました。広くて湯加減もよくとても気持ちよかったです」
「へぇ?!そ、それならよかったです・・・」
「涼子さんも藍香さんも。皆さんご一緒だったのですね」
「え、ええ・・・」
「うん・・・」

陽菜さんは素っ頓狂な声を上げてなんだか落ち着きがないような様子だ。
二人もそんな陽菜さんと同じような反応をしている。
理由はわかるような、判りたくないような・・・

「あの、皆さん。どうかなさいましたか?」

だが、あえて何も問題はない、私は普通だというように振る舞いを続けた。
が、それは許されなかった。

「あ、あのっ!・・・詩歌さん!」
「はいっ!・・・な、何でしょう。涼子さん」

何故か鬼気迫るような物言いに私も釣られるように返事をしてしまった。

「・・・・・・す」
「・・・・・・・す？」
一体何を言われるのだろうか・・・
「すごく、ゴージャスな寝巻き、だね」
「・・・・あはは」
私の中の何か大切なものにピシッとひびが入った。気がした。

第十四話（後書き）

更新大幅に遅れました！

六月に入った途端に忙しくなりまして思うように書き進められませんでした。

書き溜めはしているのですが、前後の兼ね合いなどで手直しやらなにやらしていまして・・・

そんなわけで今回は区切りがうまく見つからなかったので短いです。

更新遅れ＋何時もより短い

唯でさえ一話一話が短いのに読んで頂いている人には申し訳ありません。

次回更新は予定では１２日としています。

短いんだから頑張れ！と思いますけれど、私の力では・・・！

繋ぎに随時更新型の人物紹介などはいかがでしょうか・・・？

気になるあの娘のあんな事やこんな事を！

なにかありましたらどしどしお願いします。

第十五話（前書き）

１２日に更新するつもりはありました・・・

第十五話

涼子さんの衝撃的な発言により私は思考が停止してしまった。
まだ初日も終わっていないと言うのにこんなスタートなんて・・・

「なんというか、お姫様みたいな・・・「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」とか言いそうな！」
「あはは・・・そ、そうみえますか」
「あたしなんかには似合わないけど、詩歌さんだから似合うよ。顔とすごく釣り合ってる感じだし」
「ありがとうございます・・・」

私はマリー・アントワネットですか！？
褒めてくれてはいるのだろうけど・・・微妙に嬉しくないと言うか、素直に喜べないな。

「あれ？もしかして、あまり嬉しくない・・・？」
「自分で選んだものならば、褒められた事には素直にお礼を言いたいところなのですけれど」

苦笑いをもらしながら答えると涼子さんは一瞬キョトンとした

「え？・・・それじゃこれ、誰がえらんだの？」
「母が・・・」

涼子さんは改めて私の姿を上から下までしみじみと眺める。

「ふーん・・・・・・うん。良いんじゃないかな？こういうものが似合う人ってなかなかいないと思うし・・・」

「そう、ですか？」
「さすが母親だね。自分の娘の長所をよくわかってるんだ・・・・・・ちょっと羨ましいかな」
「羨ましい？」

ふと涼子さんから漏れたようなその言葉が何故か気になった。

「あ、いや。あたしこんな感じだし、変わりに選んでもらったとしてもそんな女の子女の子したようなものは選んでもらえないなって思って、あはは」
「涼子さん・・・」

彼女は私に嘘を吐いた。
会ってからまだ一日と経ってはいないが何度か会話を交わして少しは人柄を理解している。
涼子さんは思ったこと、自分の気持ちをストレートに言う人だ。
今の「羨ましい」は本当にそう思って口に出たのだろうけど、その理由は恐らく違うのだろう。
とはいえ、ここで態々聞く事でもないだろうし。
本当のことを知ったからといって私に何が出来るとは限らないし、ここは流しておくべきだろう。

「そんなことはないと思いますけれど・・・あ、どうでしょう。もう一種類ありましたからそちらを着てみませんか？」
「あ、あはは・・・遠慮しておくよ」
「そう仰らずに、私は構いませんから」

私のちょっと意地悪な提案に涼子さんは慌てた様子だった。

「涼子をからかうのはその辺にしてあげて、詩歌さん」

「ふふ、そうですね」

そんな涼子さんに今まで黙っていた藍香さんが助け舟を出した。

「えっ、あたしのことからかってたの！？もう！・・・詩歌さんってやっぱりちょっと意地悪だ」

「申し訳ありません。ですが、御貸ししようとしたのは本当ですよ？」

「それは・・・」

その言葉に、涼子さんは自分の着ている姿を想像したのだろう

「絶対似合わないから遠慮します・・・」

「ふふっ、それは残念です」

苦笑い交じりに答える涼子さんが少し可笑しく思わず笑いがもれてしまった。

「詩歌ちゃんのそれもやはりお母さんが選んだんですね」

「はい、そういうことです」

陽菜さんもようやく復活したようで、残るは朱音だけだ。

「それで、朱音はいつまで固まっているのかしら？」

「はい！？・・・あ、えっと、ちょっと驚いちゃって・・・」

私に呼ばれて我に返ったのか素っ頓狂な声を上げてなんとも言えないように、あはは、と気まずそうに笑いながらごまかした。

「皆さんの反応で大体わかっていましたけれど・・・そんなにおか

しいでしょうか・・・」

自分の姿を改めた後、裾をちょっと摘まん部屋にいる皆にで聞いてみた。

「ええ、私とても似合っていると思うわよ」
「うん、詩歌さんにぴったりだと思う」
「そうですね。むしろ詩歌ちゃんだから似合っているという感じですね」
「いえ、そんなわけじゃないです。ただ・・・」
「・・・ただ？」

どうやらおかしいとは思われてはいないのだろうけど、何だというのだろうか。

「「「「お姫様ってこんな感じなんだって感動しちゃって・・・」」」」
「・・・・・・え？」

四人とも同時にまったく同じ台詞を口にした。

第十五話（後書き）

本当に１２日に更新するつもりで頑張ったのです！

が！

更新しますします詐欺になりつつありますね、ごめんなさい

今月は３日に１回更新から週１，２回にさせてください。

まったく時間が取れないわけではないのですが、疲れと眠気と自分の納得いく文が作れない文才のなさの所為です。

自分の文才のなさの所為で詰まる所が多々ありまして・・・

イメージは出来ているのですがそれを納得のいくように文にして表すのが思うように出来なかったので、結局いろいろ妥協して書いてみました。

取り敢えず、物語はスタートラインに立ちそうなところまで着ました！

実際スタートするのはいつになるやら・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8508s/

お嬢様と日常と

2011年10月4日08時54分発行